病院図書室　19(1):18-21, 1999

臨床に役立つ雑誌⑯

漢　方　医　学

山際　幹和

はじめに

わが国で現在行われている医療の主体は西欧で発達した医学、すなわち西洋医学の知識や技能に基づいている。そして、わが国の医学教育機関における教育の大部分は現代西洋医学に関するものである。この様な状況は、明治になって顕著になったものであり、江戸時代中期に受け入れられた西欧の医学、すなわち、当時、蘭方医学と呼ばれた医学が加速度的に普及したことによる。その隆盛と相まって、明治16年（1883年）に太政官布告として医師免許規則が公布され、医師になるためには生理、解剖、内科、外科などの西洋医学科目の試験に合格することが義務づけられた。これは、中国より朝鮮半島を経由して受け入れられ、わが国で独自の発展をとげた医学である漢方医学を一層角に追いやった。すなわち、漢方医学にどれだけ精通しても、医師の資格を得ることができなくなった。その結果として、漢方医学はさらに衰退の一途をたどり、わずかに、一握りの医師の間で細々と受け継がれてきた[1]。

その漢方医学が、第二次世界大戦後に見直されるようになった。それには、主として煎じ薬のかたちで用いられてきた漢方薬の新しい剤型として、エキス剤が開発され登場したことや、漢方薬に対しても健康保険が適用されるようになり、いわゆる西洋医が漢方薬を使用する機会が増えたことがきっかけになっている。医師は漢方薬の使用機会が増えると、比例してそれがよく効いた例を少なからず経験するようになり、その有効例の経験がさらに使用頻度を増加させる結果を生んだ。

現代は、中国医学をはじめとしてアーユルヴェーダ医学、ユナニ医学などが見直され、カイロプラクティック、光線療法、針灸などの相補代替医療（complementary and alternative medicine）にも関心が高まっている時代であり、漢方医学にとっても良い時代である。とはいっても、漢方医学関連雑誌数は西洋医学雑誌数に比べれば格段に少ないことも事実である。

Ⅰ．漢方医学雑誌の過去

表１は、現代漢方医学の成立過程において大きな役割を果たした教科書のひとつである「漢方診療医典」[2]に出現する「明治以降の漢方医学書および雑誌出版の消長」に関する表を改変したものである。

調査は明治元年以降、10年区切りで昭和52年にいたるまで行われているが、明治21年以降の10年間に、漢方医学書の出版数は激減し、ついに、同31～40年の間には、漢方医学書と雑誌の双方を合わせても一冊も出版されなかった。そして、漢方医学雑誌にいたっては、じつに明治31年より昭和２年の30年間にわたり一冊も出版されていない。このように、いったん凋落した漢方医学が復活の兆しをみせ始めたのは昭和にはいってからである[3]。

明らかな出版数の増加が窺われるように

やまぎわ　みきかず：松阪中央総合病院耳鼻咽喉科

なったのは第二次世界大戦後10年を経た昭和30年以降であり、昭和43年以降の10年間には漢方医学書が209冊、同雑誌が15冊出版され現在にいたっている。

1967年（本格的には1976年）以降続々と医療用漢方製剤が保健診療の場に登場し、それが現代医学の中での漢方医学の復興に直接的あるいは間接的に関与したのは明白である。すなわち、身近になった医療用漢方製剤の使用頻度が増すにつれてその有用性が見直され、漢方医学書や雑誌の出版にも拍車がかかったといえる。

表１　漢方医学書および雑誌出版の消長

期間	出版数	
	漢方医学書	漢方医学雑誌
明治元年～１０年（1868-1877）	7	0
明治１１年～２０年（1878-1887）	15	5
明治２１年～３０年（1888-1897）	2	4
明治３１年～４０年（1898-1907）	0	0
明治４１年～大正６年（1908-1917）	6	0
大正７年～昭和２年（1918-1927）	8	0
昭和３年～１２年（1928-1937）	33	7
昭和１３年～２２年（1938-1947）	19	5
昭和２３年～３２年（1948-1957）	24	9
昭和３３年～４２年（1958-1967）	80	7
昭和４３年～５２年（1968-1977）	209	15

Ⅱ．漢方医学雑誌の現在

表２は、1999年度版醫學中央雑誌収載誌目録[4]の中から定期刊行されている和文漢方医学雑誌を拾い出し表示したものである。それらは、月刊から年刊にいたるさまざまな頻度で刊行されている。それらが掲載する論文の内容は、古代中国医学を基礎として日本で独自に発展したいわゆる狭義の漢方医学からアジア、ひいては、世界各地の伝統医学にいたるまで多岐にわたる。

著者は、さまざまな立場から基礎的あるいは臨床的研究を行い論文を執筆しているため、東洋医学に関連した歴史的文献資料の紹介や解釈、また、極めて忠実に伝統医学的手法を用いた患者の診断・治療成績、などから純粋に西洋医学的な方法を用いた漢方薬の基礎的研究や臨床応用にいたるまで、その内容は変化に富んでいる。また、論文中に出現する文体は、通常の医学書や医学雑誌にみられるような現代文語体や現代欧文体にとどまらず、それに古代文語体や漢文体も混在し、現在のわれわれが殆ど用いることがない、意味はおろか読み方すらわからない漢字が頻出するこ

表２　和文漢方医学関連雑誌

雑誌名	発行年	発行所	所在地	発行回数	ISSN
痛みと漢方	1980	痛みと漢方シンポジウム	東京	年刊	0916-7145
漢方医学	1977	臨床情報センター	東京	月刊	0288-1872
漢方研究	1958	月刊漢方研究　薬学之友を前身とする	大阪	月刊	0385-6526
漢方診療	1982	臨床情報センター	東京	隔月刊	0288-3643
漢方調剤研究	1993	臨床情報センター	東京	隔月刊	1342-1360
漢方と最新治療	1993	世論時報社	東京	年４回刊	なし
漢方の臨床	1954	東亜医学協会	東京	月刊	0451-307X
月刊漢方療法	1997	たにぐち書店	東京	月刊	なし
現代東洋医学	1980	医学出版センター	東京	季刊	0388-6719
実地医家のためのTHE KAMPO	1998	ジャパンマーケティングサービス	東京	年４回刊	1344-350X
千葉東洋医学シンポジウム	1972	千葉東洋医学シンポジウム世話人会	東京	年刊	なし
伝統医学	1998	臨床情報センター	東京	年４回刊	1344-2171
東医学研究	1981	東医学研究会	東京	季刊	0910-6723
東方医学	1985	東方医学会	東京	年４回刊	0911-7768
東洋医学	1973	緑書房　東洋医学（自然社）より改題	東京	月刊	0385-4469
東洋医学とペインクリニック	1971	東洋医学とペインクリニック研究会	高槻	年４回刊	0287-1726
日本歯科東洋医学会誌	1983	日本歯科東洋医学会	東京	年２回刊	0915-7573
日本東洋医学雑誌	1950	日本東洋医学会　日本東洋医学会誌より改題	東京	月刊	0287-4857
和漢医薬学雑誌	1984	和漢医薬学会　和漢医薬学会誌より改題	富山	年４回刊	1340-6302

表3 Index Medicus中の東洋伝統医学関連雑誌

雑誌名	言語	ISSN
Acupuncture and Electro-Therapeutics Research (New York NY)	英語	0360-1293
American Journal of Chinese Medicine (New York NY)	英語	0192-415X
Chen Tzu Yen Chiu Acupuncture Research (Beijing)	中国語	1000-0607
Chinese Medical Journal (Beijing)	英語	0366-6999
Chung-Hua I Hsueh Tsa Chin (Chinese Medical Journal) (Peking)	中国語	0376-2491
Chung-Kuo Chung Hsi I Chieh Ho Tsa Chih (Pei-ching)	中国語	1003-5370
Chung-Kuo Chung Yao Tsa Chin China Journal of Chinese Materia Medica (Pei-ching)	中国語	1001-5302
Journal of Traditional Chinese Medicine (Beijing)	英語	0254-6272

とも和文西洋医学書や雑誌ではみられない特徴といえる。これは、繰り返しになるが、漢方医学が中国医学を母体としてわが国で独自の発展を遂げ、現在もなお生き続けている医学であることによる。

他方、表3はList of Journals Indexed in Index Medicus (1995)[5] の「Medicine, Oriental Traditional」の項に出現する鍼灸や中国医学に関する雑誌である。これらの中では東洋の伝統医学が広範に取り扱われており、狭義の漢方医学を学ぶ際にも十分参考となる。残念ながら、いずれの雑誌もわが国で発行されているものではなく、言語は英語と中国語である。

ちなみに、1996年度のImpact Factor[6] はAm J Chinese Med (ISSN 0192-415X)が0.453、Chinese Med J - Peking (ISSN 0366-6999)が0.115であった。

Ⅲ. 漢方医学雑誌の未来

近年のわが国における漢方医学の普及とその研究の進歩には目をみはるものがあり、特に、西洋医学的、つまり科学的手法を用いた研究は世界の最先端に位置することは自他ともに認める点である。そして、この研究の成果を世界各地に伝達することはわが国の漢方医学研究者の責務である。そのためには、まず、「伝統医学の研究や評価を行うにあたって好ましい方法として推奨されている方法」[7] を遵守して研究成績をだし、それを国際語ともいえる英語で発表することが最も効果的であり、いわば必須となる。その意味で、わが国でも漢方医学英文雑誌が刊行されることが強く期待される。そうすれば、ひとつには海外の雑誌に分散投稿されている漢方医学英語論文がそこに集約されるであろうし、他にも、漢方医学研究者が東洋医学の基準で審査することによりはじめて日の目をみうるような研究成果が選出掲載され、西洋医学の世界に強いインパクトを与えうる可能性もある。

しかしながら、現実的には、漢方医学の詳細を英語を媒体として正確に伝えることは極めて難しい。漢方医学は、その起源が仮に中国よりさらに西方の地域にあったとしても、実質的には漢字文化圏の中で形成された医学である。したがって、病態やそれに対する薬物は数個の漢字を用いて表現できるものの、その英訳となると困難を感じる点が多々ある。たとえば、漢方薬（処方）の中でもカゼの初期によく飲まれる葛根湯（かっこんとう）は、中国語の発音に基づいて「Ge gen tang」と英訳（ローマ字表記）されるが、それを構成する生薬や薬効までも英語で伝えようとするとかなりのスペースを割くことになる。逆に、漢方薬がローマ字表記されたものをみて、それがわが国でどのように呼ばれているか、あるいは、漢字表記されているかを言い当てることはより至難の技である。多分、この状況

は、やはり中国医学を母体として独自の韓医学を完成させた韓国においても同様であろうと思われる。そのような状況下で、わが国では、約5年前に、はじめて和英東洋医学用語集[8]が発行されたことは意義深く、それが漢方医学英語論文の量産につながり、ひいては、わが国での漢方医学英文雑誌の発刊につながれば、最終的に、真の意味での東西医学の融合につながるはずである。

おわりに

漢方医学雑誌のみならず医学雑誌の未来を考えたとき、インターネットを介してのその雑誌の情報化は必須となる。近い将来、医学雑誌に掲載された論文、少なくともその要旨はデータベース化されて、コンピューター画面上で読めるようになるはずである。

この点でも、和文漢方医学雑誌には独自の問題点がある。それは、漢方医学の世界で、古来より頻繁に用いられてきている約180の漢字が日本工業規格（JIS）の第一、第二水準の漢字に含まれていないことである。このような問題点を解決するために、環境をいかに整備していくかも、漢方医学雑誌の未来を方向付けるうえでの課題になる。

【参考文献】

1）赤堀　昭：第二章　日本における漢方の進展、日本の技術4　漢方薬（日本産業技術史学会　監修）、37～48頁、第一法規出版、東京、1988.

2）大塚敬節、矢数道明、清水藤太郎：漢方研究者のために、漢方診療医典、583～634頁、南山堂、東京、1979.

3）安井広迪：漢方医学の歴史、医学生のための漢方医学　入門の手引き、16～23頁、医療法人清風会、四日市、1995.

4）医学中央雑誌刊行会：醫學中央雑誌収載誌目録1999年、東京、1998

5）U.S. Department of health and human services, Public health service, NIH: List of Journals Indexed in Index Medicus, National Library of Medicine, p190, Bethesda, Md.1995

6）SCI Journal Citation Reports on CD-ROM: Subject Category Listing, 1996

7）WHO Restricted Draft Document: Methodologies of Research and Evaluation on Traditional Medicine.日本東洋医学雑誌 49:203-240,1998.

8）丁　宗鉄　編著：増補改訂　和英東洋医学用語集、医聖社、東京、1993